



巻頭インタビュー②

富士山の森 森づくりを楽しむ

富士山の自然林再生活動を初めて20年余り。

「富士山自然の森づくり」は、ふじさんネットワークと静岡県共催の根原県有地の草原性植生保全に尽力されています。

その会の理事として、森づくりを行なう

仁藤浪理事長に語っていただきました。

NPO法人 富士山自然の森づくり 仁藤 浪理事長

広葉樹による自然林の再生

雄大な富士山の山麓に住みその素晴らしい姿を日々眺め大切にしたいと願わずにはいられない。富士山及び山麓の自然環境の保全を願い59年に仲間と「富士宮自然観察の会」をつくり自然観察・保護の活動に入った。

平成8年9月台風17号により富士山国有林は風倒の被害を受けた。面積は約720haでその大半は人工林のヒノキ・ウラジロモミである。管轄である林野庁は復旧を検討して「風雪に強い富士山の森」にするため広葉樹による再生をきめた。その再生活動をボランティアに求め国有林への出入りを図った。風倒地は静岡森林管理署が倒木等を整理してボランティアに活動の場として提供した。

富士宮自然観察の会は森づくりに取り組むため諸団体に声をかけてから平成9年9月「富士山自然の森づくり」を立ち上げ活動に入った。10

月に現場で現状を知るため現地観察会を実施し多数の参加を得た。しかし自然林の再生活動はほとんど行われていない状況であったので「富士山の森を再生する」を基本に自然から学ぶことからはじめた。それは植えることより自生する樹木を大切にすることである。広葉樹の植栽は富士山由来のものとし分布帯違いや外来・園芸種は植えない・富士山から採取した稚樹、種子を苗畑で育て成長してから山に戻す・自生してきた稚樹、幼樹を保全するため支柱竹を挿す。下刈りは全狩りをしないで木の成長をみて部分狩りとし低木は刈らない・風倒に耐えた人工林・ウラジロモミの未熟木を適宜伐採して光を入れ残った木に力を付けると同時に自生種の芽生えを促し針広混交林化を図る・ニホンジカ等の被害の被害を少なくする方法をとるなどであり活動のなかで順次実践してきた。

自然から多くのことを 教えられる

活動をするにより多くのことを学んだ。自然の治癒力は予想以上に早い。植栽地と風倒未着手地を比べてみれば歴然と判る。自然林の再生は人工林や里山の森づくりと全く異なりその延長ではない。自生種の芽生えはその環境により早遅があり

種類も違う。生態系の大事さや生物多様性は自然林が重要な場であることなど再認識した。

私たちは今厳しい山の作業に汗をながしているが将来いつか富士山の森が再生されるといふ願いがかなうことを楽しみにしている。活動も風倒地からウラジロモミ林強化に拡大することを望みたい。



平成10年に植栽した場所の現況を観察する仁藤理事長と森づくりの仲間たち。



人工林のウラジロモミの間伐は、自生種の成長促進のためにも重要。

仁藤 浪氏 にとう なみ

プロフィール

富士宮市在住。昭和59年に富士宮自然観察の会を発足し、平成9年に現在理事長を務める「富士山自然の森づくりの会」を設立（平成15年NPO法人認定）。旧天城湯ヶ島町開催の第50回全国植樹祭では、天皇・皇后両陛下の前で「森づくり宣言」を行う。平成29年、自然保護功労知事表彰及び自然公園関係功労者環境大臣表彰を受章。その他、「ふじさんエコレンジャー連絡会」会長、「富士山国有林森づくり連絡協議会」会長などを歴任。林野庁長官賞、国土緑化推進機構会長賞他。



富士山の自然林再生に多くの仲間が参加している。